愛知教育大学研究報告，55（人文・社会科学編），pp. 25～30，March, 2006

# 内村鑑三とユダヤ人 I
## 再臨運動とユダヤ人問題

黒川知文

Tomobumi KUROKAWA

社会科教育講座

### 序

「ユダヤ人の歴史は大なる奇跡である。その今日まで幾多の迫害に耐えて四千年間の存在を続けしことが大なる奇跡である。その聖書の預言にかないてパレスチナの地を回復しつつあることがまた大なる奇跡である」[1]と内村鑑三は，1918年5月12日に，東京の神田にあるバプテスト中央教会において講演した。この講演の半年前の11月2日には，バルフォア宣言が公布され，第一次世界大戦後にユダヤ人の国家を建設することをイギリスはユダヤ人に約束している。

さらに同講演は「しかして注意すべきは，ユダヤ人に関するこれらの奇跡が，今日われらの信仰にとってきわめて深き関係を有することである」[2]と続き，ユダヤ人問題は内村の時代に生きた日本のキリスト者の信仰の問題でもあることを指摘する。そして，ユダヤ史を概説して，シオニズムにまで言及している。

1916年に内村は英文の再臨論に感銘し，1918年から再臨の宣教に力を注いだ。したがって，内村の再臨運動とユダヤ人問題には，何らかの関係があるように思える。

内村は，なぜ晩年において，再臨運動に参加したのであろうか。これについては，個人的に，1912年に長女ルツが死去したことが来世への希望が再臨への待望へと結び付いたと考えられる。だが，それだけでは不十分である。

いかなる歴史的状況に内村はいたのであろうか。

本稿は，内村鑑三の再臨運動とユダヤ人問題との関係を考察するものである。第一章においては，内村の生涯とユダヤ史との関連を概観する。第二章では，内村のユダヤ人観を検討し，第三章において，再臨運動とユダヤ人問題について考察したい。[3]

### 第一章　内村鑑三の生涯とユダヤ史

内村とユダヤ人との関係を歴史的に考察する前作業として，内村の生涯を概観する。

内村の生涯は，準備期，留学期，初期活動期，試練期，宣教活動期，そして円熟期に区分することができる。以下，順に見ていく。

#### 1　準備期

万延2年（1861年）3月23日，江戸の高崎藩の武士長屋に鑑三は生まれた。父は高崎藩江戸詰藩士であった。慶応4年（1868年），王政復古となり，一家は高崎藩に引き揚げた。

鑑三は，明治5年に藩の英学校に学び，明治6年には上京して，有馬私学校に入学した。この年，キリスト教が解禁になっている。翌年には東京外国語学校英語学下等第4級に編入した。彼の英語は秀でていた。明治10年（1877年），鑑三は17歳にして札幌農学校へ第二期生として入学した。この年，上級生から促されて「イエスを信ずる者の誓約」に署名した。さらに父が若くして隠居して，鑑三は家督を相続した。翌年には，M.C.ハリス宣教師から洗礼を受けた。この時期には信仰の仲間との親しい交わりがあり，「おもちゃの教会」を運営して，すでに信徒による礼拝を実施していた。

明治14年（1881年），第二期生10名の首席として卒業し，開拓使御用掛となった。信仰的には，札幌基督教会の独立を達成し，父を受洗に導いた。職業においては，水産業に関する論文を発表する一方，あわびの卵子を発見した。

明治16年（1883年）4月には御用掛を辞職し，東京における第三回全国基督信徒大親睦会に出席して「空ノ鳥ト野ノ花」と題する演説で評判を得た。12月には『日本魚類目録』を作成した。

このように，信仰的にも職業的にも充実していたが8月に結婚した浅田タケと翌年の10月に離婚するに至った。この離婚の痛手のために渡米する。

この時期のユダヤ史においては，特にロシアにおいて大きな変動が生じた。1881年のポグロムである。[4]帝政ロシアの南ロシア（ウクライナ）において，「南部の暴風」と呼ばれるユダヤ人に対する破壊活動が自然発生的に200以上の個所で発生した。その結果，1882年には，パレスチナへの移民運動であるビールー運動が開始され，第一次アリヤー運動として移民が実

施された。

鑑三が生まれた翌年1862年には，ドイツのユダヤ人モーゼス・ヘスがシオニズムの先駆的著書である『ローマとエルサレム』を出版しており，鑑三が卒業した年にはポグロムが発生し，ヨーロッパのユダヤ人の歴史が，大きくシオニズムへと展開しようとする状況にあったことがわかる。すなわち，ロシアにおけるポグロムにより自発的なパレスチナ移住が開始され，西欧においてもシオニズム思想が萌芽しつつあった。

### 2　留学期

鑑三は離婚の一ヶ月後に渡米した。そして24歳からの4年間をアメリカで過ごすことになる。

明治18年（1885年）1月から7月まで，鑑三はエルウィンの精神薄弱児養護施設で看護人となった。そして9月からマサチューセッツ州アマスト大学に編入する。翌年の3月8日に，シーリー学長の感化を受けて真の救いを経験する。贖罪信仰に至ったのである。

明治20年（1887年）7月にアマスト大学を卒業し，9月からはコネチカット州のハートフォード神学大学に入学する。しかし長くは続かず，翌年1月に退学して帰国する。

退学の理由としては，健康や経済事情とともに神学の違いと聖職者になることへの葛藤があったと考えられる。

この時期のアメリカは，民主党のクリーヴランド大統領の治下，経済的に大きく発展し，1890年にはフロンティアの消滅が唱えられた。そこへ，ロシアから迫害を逃れて大量のユダヤ人が移住してきた。ポグロムが発生した1881年から1910年において，アメリカに移住したユダヤ人数は156万2800人であり，その約7割の111万9059人はロシア出身であった。（表1参照）

鑑三もボストンへ行く途中に立ち寄ったマンハッタンにおいてユダヤ人に出会ったと推定される。

表1　合衆国へのユダヤ移民の出身国別分類

| 出　身　国 | ユダヤ移民数 | 比率 |
|---|---|---|
| ロシア帝国 | 1,119,059 | 71,6 |
| オーストリア・ハンガリー | 281,150 | 18,0 |
| ルーマニア | 67,057 | 4,3 |
| イギリス | 42,896 | 2,7 |
| ドイツ | 20,454 | 1,3 |
| カナダ | 9,706 | 0,6 |
| トルコ | 5,276 | 0,3 |
| フランス | 2,299 | 0,1 |
| その他 | 14,903 | 1,0 |
| 合　計 | 1,562,800 | 100,0 |

（1881－1910年，単位：　人，　%）

野村達郎『ユダヤ移民のニューヨーク』
（山川出版社，1995年）21頁

### 3　初期活動期

明治21年（1888年）5月16日に鑑三は帰国した。9月から新潟北越学館へ仮教頭として赴任したが，教育方針で宣教師と衝突し，12月に辞職した。翌年3月から，鑑三は東洋英和学校と東京水産伝習所の講師となり，7月には横浜加寿子と再婚した。9月からは明治女学校の講師になった。

明治23年（1890年）7月には，基督教青年会夏期学校で講演し，9月には第一高等中学校嘱託教員となり英語と地理と歴史を教えた。

帰国して，自由な教育方針をめぐり宣教師との紛争に巻き込まれたが，再婚，そして教員への就職，さらには基督教講演と，この時期には日本社会への順調な適応が見られる。

西欧の特にフランスとドイツにおいて，ユダヤ人は近代的民族主義勃興の結果，差別をうける。1886年にドリュモンは『ユダヤ人のフランス』を出版してユダヤ人を非難した。ドイツにおいては，1875年においてすでに「反ユダヤ主義」という言葉が使用され始め，1878年頃から政治的反ユダヤ主義の傾向が高まった。一方，ポグロム後に公布された反ユダヤ的な五月法により，ロシアのユダヤ人は差別されていく。その結果，革命運動にユダヤ人の青年層が参加していった。

### 4　試練期

内村鑑三の人生を大きく変えたのが不敬事件であった。

明治24年（1891年）1月9日，第一高等中学校において，教育勅語の末尾にある天皇の署名に対して，教員と生徒全員が最敬礼することになっていたが，鑑三は敬礼ではなく会釈をした。そのことが千人以上の生徒と60人の教授に目撃されて，大きく事件として発展した。日本は鹿鳴館時代が終わり，前年に教育勅語が公布され，天皇制がしだいに強化されようとする状況にあったことが，この事件を拡大させた。

鑑三は依願免職となり，「不敬な人物」として非難され攻撃される中，肺炎に倒れる。妻も過労と病気のために4月に死去した。人生において最も苦難の時であった。国民からだけでなく基督教会からも非難され，鑑三を支持する者は少数であった。(5)

失職した鑑三は日本全国を移動する。北海道と新潟に寄留した後，翌年5月には基督教新聞編集員，9月には大阪の泰西学館に赴任，大阪高等英学校教師を兼任し，12月には岡田静子と再婚した。

明治26年（1893年）には，4月に泰西学館を辞任して九州に行き，熊本英学校に赴任したが，7月には京都に移住した。明治27年（1894年）1月から5月にかけて第三高等学校ＹＭＣＡの日曜学校で聖書講義を行った。7月には「後世への最大遺物」講演をした。

明治28年（1895年）12月から翌年2月まで基督教教義月曜学校に行っている。また，9月には名古屋英語学校教師になった。

この間，鑑三は自らの体験に基づいた信仰的著作を以下のように発表した。

・『基督教信徒のなぐさめ』明治26年（1893年）2月
・『求安録』同年8月
・『路得記』同年12月
・『伝道の精神』明治27年（1894年）2月
・『How I became a Christian』明治28年（1895年）5月

このように，不敬事件により鑑三は，新潟－東京－大阪－九州－京都－名古屋と職を求めて移動した。さらに，教師あるいは文筆家という知的職業に就き，堅固な信仰者として知られた。これらのものは，いずれもユダヤ人に共通するものだと考えられる。ユダヤ人は中世において，ユダヤ教を保持して土地を所有せずにその多くは知的職業に就いたからだ。

この時期の日本では，日清戦争が起こり，鑑三は義戦論をとる。しかし，後には非戦論に変化する。

ユダヤ史では，フランスにおいて重要な事件が起きている。ドレフュス事件である。

1894年10月15日，フランス軍参謀本部に勤務していたユダヤ人士官ドレフュスが，スパイ容疑で逮捕された。これによりフランスにおいて，反ユダヤ感情が広まった。ドレフュスは軍法会議で有罪とされて，悪魔島へ流刑とされた。しかしその後，偽造文書が発覚し，1899年に再審が実施されたが，ドレフュスの有罪は再確認された。ただし減刑が勧告され，大統領の特赦により釈放された。

この事件は近代的反ユダヤ主義を象徴するものである。この時，ドイツの新聞社から特派員として派遣されてドレフュス事件を取材したのがテオドール・ヘルツルであった。彼はこの事件を間近に取材することにより，自らのユダヤ性に目覚め，シオニズム思想を持つに至る。

ヘルツルは1896年に『ユダヤ国家』を書いた。これは，反ユダヤ主義は困難な問題であり，ユダヤ人が自らの国家を持たない限り解決できないとする内容であった。

### 5　宣教活動期

明治30年（1897年）鑑三は『萬朝報』英文欄主筆となり，東京の青山に転居した。いよいよ社会に対して積極的に福音を宣教する段階にはいった。

鑑三は以下の信仰雑誌を次々と発行していく。

・『東京獨立雑誌』　明治31年（1898年）創刊　月2回，後に月3回　72号で廃刊
・『聖書之研究』　明治33年（1900年）創刊　月2回，後に月1回　357号で廃刊
・『無教会』　明治34年（1901年）創刊　月1回　18号で廃刊

これらの雑誌の購読費と日曜の聖書講義の講義費だけが，鑑三の経済的基盤であった。したがって，これらの雑誌において自らの主張を表現し，聖書講義においても自由に語ることができた。

また，聖書講義参加者や雑誌購読者から成る教友会が組織され，宿泊施設である教友会館も開設された。

講演会も以下のように全国に及んだ。

・月曜講演　ＹＭＣＡ　明治31年（1898年）1月
・第10回基督教青年会夏期学校講演　同年　7月
・第1回夏期講談会　明治33年（1900年）7－8月
・第2回夏期講談会　明治34年（1901年）7－8月
・第1回札幌伝道旅行　同年　10月
・第3回夏期講談会　明治35年（1902年）7－8月
・第2回札幌伝道旅行　同年　9月
・柏崎教友会夏期懇話会　明治39年（1906年）8月
・教友会第2回夏期懇話会　明治40年（1907年）8月
・第3回札幌伝道旅行　明治45年（1912年）10月

さらに，聖書講義や社会問題などを内容とする著書も多く出版していった。

社会問題に対しては，批判するだけでなく意欲的に参加もしている。たとえば，明治36年（1903年）には足尾鉱毒被害者に援助品を送り，翌年からは日露戦争に対して非戦論を展開した。さらに，大正2年（1913年）には，アメリカのカリフォルニア排日移民法を批判した。

宗教にとどまらず，教育や社会問題に対しても鑑三は積極的に関与したことがわかる。

この時期のユダヤ史は，ロシアに変動が見られる。1905年に第一革命が発生した。革命運動を制止するために政府は，ロシア民衆の関心をユダヤ人に向けさせようと，新聞に反ユダヤ的記事を書かせた。さらに，オデッサ，キエフなどの南ロシアの合計626の都市や瀬楽においてポグロムを画策した。農民や鉄道労働者などが政府の命令によりユダヤ人の家屋を破壊し略奪しユダヤ人を殺害した。第二次ポグロムの発生である。

ロシアと東欧のユダヤ人は，第二次アリヤー運動を展開して，パレスチナへ移住した。またアメリカへも移住した。

一方，シオニズムも，この時期にはしだいに大きな運動となっていく。1897年に第1回シオニスト会議が開催され，ヘルツルが議長となった。1905年には第7回シオニスト会議が開催され，政治的手続きによるユダヤ人の国家が模索された。

他方，パレスチナにおいて，ユダヤ人入植者は1909年にデガニヤに最初のキブツを建設した。

東欧においては，ユダヤ人迫害が再燃して，自発的な移住運動が展開した。西欧においては，政治的シオ

表2　内村鑑三の生涯

| 西暦と年齢 | 主な出来事 | 信仰関係 | 時代背景（ユダヤ史） |
|---|---|---|---|
| 1861　0 | 誕生　江戸高崎藩主松平右京亮中屋敷<br>3月23日　父は武士 | | |
| 1868　8 | 高崎に引き揚げる | | |
| 1873　13 | 上京し有馬学校に入学 | | |
| 1874　14 | 東京外国語学校入学 | | |
| 準備期 | | | |
| 1877　17 | 札幌農学校に入学<br>父隠居して家督を相続す | 「イエスを信じる者の誓約」に署名させられる | 西南戦争 |
| 1878　18 | | 宣教師M. Cハリスから受洗 | |
| 1879　19 | 「おもちゃの教会」運営 | 信仰の仲間との交わり | |
| 1881　21 | 開拓使御用掛となる | | （第一次ポグロム） |
| 1882　22 | あわびの卵子を発見する | 札幌基督教会献堂式 | （アリヤー運動） |
| 1883　23 | 学農社講師　農務局水産課　『日本魚類目録』作成 | 第3回全国基督信徒大親睦会にて演説「空ノ鳥ト野ノ百合」 | 鹿鳴館成る<br>リバイバル |
| 1884　24 | 結婚　破婚　農務局辞職 | 感傷的キリスト教徒の交わり | （ヒバトツィオン結成） |
| 留学期 | | | |
| 1885　25 | エルウィン養護学校の看護人<br>アマスト大学3年に編入 | D. C. ベルと知りあう<br>クラークに会う | |
| 1886　26 | 夏休みをエルウィンで過ごす | 学長シーリーの感化により贖罪の信仰に至る<br>天職の発見 | |
| 1887　27 | ハートフォード神学校に入学 | | （ホベベイ・ツィオン結成） |
| 初期活動期 | | | |
| 1888　28 | 神学校を中退して帰国　新潟北越学館仮教頭になるが宣教師と衝突して辞職 | | 旧約聖書邦訳刊 |
| 1889　29 | 東洋英和学校・東京水産伝習所講師<br>再婚<br>明治女学校高等科講師 | | 大日本帝国憲法発布 |
| 1890　30 | 第一高等学校嘱託教員 | 基督教青年会主催第2回夏期学校で講演<br>クロムウェルの生涯に感動 | 教育勅語公布 |
| 試練期 | | | |
| 1891　31 | 「不敬事件」依頼解嘱<br>妻死去　肺炎になる | 本郷教会にて講義「エレミヤ書」<br>『基督教新聞』に寄稿 | |
| 1892　32 | 『基督教新聞』編輯員<br>大阪泰西学館講師　再婚 | | |
| 1893　33 | 熊本英学校講師 | 『基督信徒のなぐさめ』『教育時論』：井上哲次郎と討論<br>基督教青年会主催第5回夏期学校に出席<br>『求安録』『ルツ記』 | |
| 1894　34 | 長女ルツ子生まれる | 『地理学考』<br>基督教青年会第6回夏期学校で講演<br>「後世への最大遺物」<br>"Japan and the Japanese"<br>"How I became a Christian" | （ドレフュス事件）<br>日清戦争 |
| 1895　35 | | | |
| 1896　36 | 名古屋英和学校講師 | 基督教青年会第8回夏期学校で講演 | （ヘルツル『ユダヤ国家』） |
| 宣教活動期 | | | |
| 1897　37 | 『万朝報』英文欄主筆<br>長男祐之生まれる | 『後世への最大遺物』 | （第一回シオニスト会議） |
| 1898　38 | 万朝報退社 | 神田基督教青年会館で「月曜講演」<br>『東京独立雑誌』創刊<br>基督教青年会第10回夏期学校で講演<br>「今日の困難」 | |
| 1899　39 | 私立女子独立学校校長 | 二高基督教青年会「東北人士の天職」 | |
| 1900　40 | 万朝報社客員になる | 『宗教座談』<br>『聖書之研究』創刊 | |
| 1901　41 | 足尾鉱毒問題解決期成同志会に加わる | 『無教会』創刊<br>自宅で日曜聖書講義 | |
| 1902　42 | 理想団春季大会 | 北海道伝道旅行<br>自宅で角筈聖書研究会 | 日英同盟 |
| 1903　43 | 万朝報社を退社 | 「基督教と社会主義」『聖書之研究』 | |
| 1904　44 | 母死去 | 『聖書之研究』にて非戦論 | （第二次ポグロム） |
| 1905　45 | | 聖書改訳事業：植村正久・小崎弘道らと「教友会」結成 | （第七回シオニスト会議） |
| 1906　46 | | 柏崎教友会にて講演　大阪天満教会にて講演 | |
| 1907　47 | 父死去 | 「柏会」一高・帝大生の会：藤井、黒崎、塚本、矢内原等 | |
| 1909　49 | | | （デガニヤキブツ建設） |
| 1910　50 | | 東北伝道旅行 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1911　51 | | 『聖書之研究』廃刊<br>「白雨会」：南原、坂田、高谷等 | （ベイリス事件） |
| 1912　52 | 長女ルツ子召天 | 札幌独立教会講演「我は福音を恥とせず」「ロマ書講演」 | |
| 1913　53 | | 『所感十年』、カリフォルニア州排日法を批判 | |
| 1914　54 | | 「戦争と伝道」『聖書之研究』 | 第１次世界大戦 |
| 円熟期 | | | |
| 1916　56 | | 再臨論に感銘 | |
| 1917　57 | | | （バルフォア宣言） |
| 1918　58 | 再臨運動に力を注ぐ | 「聖書の預言的研究」講演会<br>再臨論講演：東京　大阪　京都　神戸　札幌 | ドイツ降伏 |
| 1919　59 | 集会を東京聖書研究会と称す<br>再臨運動終わる | 基督再臨問題研究関西大会で講演<br>「モーセの十戒」講演 | （第三次ポグロム）<br>（アリヤー運動） |
| 1922　62 | 藤井武と和解 | 『霊交』廃刊 | |
| 1923　63 | 聖書研究会を柏木に<br>長男祐之東大医学部卒業 | | |
| 1924　64 | 今井館改築<br>塚本虎二、助手になる | 『苦痛の福音』『ロマ書の研究』 | 排日移民法 |
| 1925　65 | 塚本を講師としたギリシヤ語聖書研究会 | 『ガリラヤの道』 | |
| 1926　66 | シュバイツァーの医療伝道に寄付 | 『Japan Christian Inteligencer』創刊 | |
| 1928　68 | 信仰五十年の祝宴 | 『十字架の道』 | （ビロビジャン計画） |
| 1929　69 | 集会を塚本に委ねる | 創世記講演（最後の講演） | 世界恐慌起こる |
| 1930　70 | 古稀感謝祝賀会<br>死去３月28日 | 『パウロの武士道』 | ロンドン軍縮会議 |

ニズムがヘルツルの指導下において実を結ぼうとしていた。このふたつの動きが，第一次世界大戦の後にひとつに結合していく。

### 6　円熟期

大正５年（1916年），親しい友人であるアメリカ人D.C.ベルからとりよせた雑誌の中に再臨に関する記事があり，鑑三はそれに感化される。それに加えて，愛娘ルツ子の死，第一次世界大戦の勃発などが鑑三の再臨運動への参加原因だとされている。

大正７年（1918年）１月，再臨運動が開始された。それ以前から再臨を説いていたホーリネスの中田重治と，組合教会の木村清松と共同して，内村もこの運動に参加する。以後１年半の間，神田ＹＭＣＡ会館における講演会を中心にして，再臨運動は展開された。

鑑三の講演は評判となり，毎回千人以上の聴衆が押し寄せた。鑑三は約60回の講演で，約２万人を相手に語った。９月には聖書研究会を神田のＹＭＣＡに移している。

再臨運動は，東京から京都，神戸，大阪，岡山，札幌へと展開していった。

さらに，鑑三は中田と木村とともに京阪神や東北，北海道へも伝道旅行を実施した。

再臨運動は，海老名弾正らの反対にあい，しだいに終息していく。だが鑑三は大正８年（1919年）には，大手町の大日本私立衛生会講堂に講演会を移すが，その年の暮れには，再臨運動は終息した。

日本において再臨運動が展開した時期は，ユダヤ史において，ひとつの転換点となる。

パレスチナはトルコの領土であったが，第一次世界大戦後はイギリスの委任統治領になった。移住したユダヤ人とパレスチナ人とは，当初は平和共存関係にあったが，ユダヤ人移民が増加することにより，険悪な関係に変化していった。そして，ユダヤ人はテロ活動により独立国家を建設しようとした。パレスチナ人も同様であった。このような情勢を背景として，イギリスは，パレスチナ人の国家樹立を約束するフセイン＝マクマホン宣言を公布し，1917年11月には，ユダヤ人に対してユダヤ国家樹立を訳するバルフォア宣言を発した。

再臨運動が開始されたのは，バルフォア宣言の２ケ月後であった。ユダヤ人問題の解決とみなされた同宣言は，鑑三の再臨運動に対して何らかの影響を与えたと考えられる。

### 7　結論

内村鑑三の生涯とユダヤ史との関係についての結論として，以下の三点が指摘できる。

第一に，鑑三が生きた19世紀後半から20世紀初頭はユダヤ史にとって最も重要な転換点であった。ロシアにおいて開始されるユダヤ人迫害と自発的なパレスチナ移住運動の展開，さらに西欧における近代的反ユダヤ主義の勃興と政治的シオニズム運動の進展，そして結果的にはバルフォア宣言によるユダヤ国家樹立への約束と，離散ユダヤ人が国家を持つ希望が与えられた時期に重なる。

第二に，鑑三の生涯は，定住せず定職を持たず，文筆活動という知的活動と宗教活動にほとんど占められていた。また，不敬事件により迫害を受け，いわば日本社会のアウトサイダーとしての生涯であった。この

ような傾向は，離散ユダヤ人の生き方にほぼ共通するものである。ユダヤ人は西欧中世においてスペインは例外として，土地所有を禁じられていたために，商業や知的職業に従事した。信仰を堅固に守り続けたが，キリスト教徒から度重なる迫害を受け，社会のアウトサイダー的存在でもあった。したがって，この共通する傾向のために，内村鑑三はユダヤ人とその歴史に同情をもちうる背景があったと推定される。

第三に，ユダヤ国家樹立を約束するバルフォア宣言公布の二ヶ月後に再臨運動が開始され，再臨運動においてユダヤ人の歴史が言及されている。したがって，内村鑑三の再臨運動にはユダヤ人問題から影響があったと推定することができる。

今後の考察として，内村鑑三はその著作や講演において，ユダヤ人をどのように理解していたのか，について分析することが必要である。

## 注

(1) 『内村鑑三信仰著作集』第13巻，教文館，1985年，134頁。

(2) 同。

(3) 内村鑑三に関する文献としては，以下を使用した。
小原信『内村鑑三の生涯』PHP文庫，1997年
『日本の名著38 内村鑑三』中央公論社，1974年
関根正雄『内村鑑三』清水書院，1967年

(4) ポグロムとロシアのユダヤ人に関しては，拙著『ロシア社会とユダヤ人』（ヨルダン社 2003年）を参照。ユダヤ史に関しては，拙著『ユダヤ人迫害史（教文館 1997年）を参照。

(5) 「キリスト教は日本の国体に合わない」とする井上哲次郎の論に対して，内村鑑三とともに反論したのは，本多庸一，柏木義円，横井時雄であった。

（平成17年9月13日受理）